

アイヌ文化教育が媒介する英語教師のスタンス変容

—言語観・倫理観・教育観の再編に着目したナラティブ分析—

坂本南美

1. はじめに

近年、英語教育においては、diversity や multilingualism への関心が高まり、学習者のアイデンティティや言語的多様性に注目した研究が進められている (Norton, 2013; Pennycook, 2010)。しかし、こうした多様性への関心は、英語や学習者の多様性をめぐる議論にとどまりやすく、教師自身が他者の言語・文化・歴史とどのように向き合い、自らの教育実践を捉え直していくのかという点については、なお検討の余地がある。特に、先住民文化を扱う教育経験は、単なる文化理解の機会ではなく、教師に「自分はこの文化について十分理解しているのか」「当事者ではない自分が語ってよいのか」といった倫理的問いを生じさせる契機となりうる。

このような経験を捉えるためには、教師の学びを知識獲得としてではなく、言語・文化・他者との関係の中で自己の位置づけを問い直す過程として理解する必要がある。Dovchin (2020) が示すように、言語教育は中立的な実践ではなく、言語的正義や他者への応答責任を含む倫理の実践である。また、Barkhuizen (2016) は、教師の語りに現れる葛藤や揺らぎを、教師アイデンティティ形成を理解する重要な手がかりとして捉えている。さらに Johnson (2009) は、教師の学びを、社会文化的文脈の中で「教えること」の意味を再定義していく過程として位置づけている。

以上を踏まえ、本研究では、アイヌ文化教育という経験を通して、若手英語教師の言語観・倫理観・教育観がどのように揺さぶられ、再編されていくのかを、教師ナラティブの分析を通して検討する。

2. 理論的枠組み

本研究では、アイヌ文化教育を通じた教師経験を、言語観・倫理観・教育観が相互に関わりながら再編される過程として捉える。

第一に、アイヌ文化教育は、教師にとって言語をめぐる前提を問い直す契機となる。英語教育において言語はしばしばコミュニケーション能力の育成と結びつけて語られるが、他方では Norton (2013) や Pennycook (2010) が指摘するように、言語は中立的な道具ではなく、歴史・権力・文化と結びついた社会的実践であると捉えられる。したがって、英語教師がアイヌ語や先住民文化に出会うことは、英語中心的な言語観を相対化し、言語をより歴史的・社会的なものとして捉え直す契機となりうる。

第二に、この言語観の揺さぶりは、他者の文化や歴史をどのように扱うのかという倫理的問いと不可分である。先住民文化や言語を教育内容として扱うとき、教師は単に知識を正確に伝えればよいわけではない。むしろ、「誰が、どの立場から、どのように語るのか」という問いに直面する。Dovchin (2020) の議論を踏まえれば、言語教育は他者の声や経験にどのように応答するかを含む倫理の実践であり、Barkhuizen (2016) が示すように、そうした葛藤や揺らぎは教師の語りの中に重要な形で現れる。

第三に、こうした言語的・倫理的な揺さぶりは、教師が自らの教育観を捉え直す契機ともなる。Johnson (2009) は、教師の学びを社会文化的過程として捉え、教師が実践の中で「教えること」の意味を再定義していく点を重視している。本研究においても、教師は知識を伝達する者としてではなく、生徒とともに学びに巻き込まれていく存在として自己を位置づけ直していた。

さらに本研究では、こうした変容が教師個人の内面的変化として完結するものではなく、継承者の語り、博物館での学び、生徒との対話、連続的授業設計、同僚たちとの協働といった関係的環境の中で生起する点を重視する。Johnson and Golombek (2016) の媒介空間 (mediational space) の議論を踏まえ、本研究では、アイヌ文化教育を、教師の言語観・倫理観・教育観の再編を媒介する空間として捉える。

3. 研究方法

本研究では、アイヌ文化教育を経験した若手英語教師 A 氏の語りを対象とし、解釈的アプローチに基づくナラティブ分析を行った。分析では、教師経験を客観的事実として扱うのではなく、教師が経験をどのように意味づけ、自己を再定位していくのかというプロセスに注目した。研究協力者である A 氏は、高等学校に勤務する若手英語教師であり、第 2 学年の修学旅行に関連してアイヌ文化を題材とした教育活動に関わった。本実践では、学年の社会科の教員を中心に第 2 学年に所属する教員がチームとなって取組み、1 年をかけて、事前学習、文化継承者による講話、北海道での博物館見学、事後の振り返り活動、調査発表活動が連続的に行われていた。

データとして、2回の半構造化インタビュー、授業資料、教師による実践記録、生徒の振り返り記述を用いた。なお、本研究は所属機関の研究倫理審査を経て実施し、研究内容を説明した後に研究協力者からインフォームド・コンセントを得た。特にインタビューでは、教師がアイヌ文化教育を通して何を経験し、それをどのように捉え直していたのかについて語りを収集した。

分析では、分析の観点として、言語観・倫理観・教育観の三観点を手がかりとしながら、教師の自己の位置づけ（positioning）がどのように変化していくのかを読み取った。また、本研究では、教師の変容を個人内の認識変化としてではなく、継承者の語り、生徒との対話、博物館での学びなどを含む媒介的空間（mediational space）の中で生起するものとして捉えた。

4. 分析

A氏の語りには、アイヌ文化教育を通して、自身の前提や教師としての立場が揺さぶられていく過程が見られた。

まずA氏は、アイヌ文化について、「（私が）中学校・高校あたりで話を聞いたことはあったが、すっかり忘れていた」と語っていた。この語りには、単なる知識不足というよりも、多文化理解を扱う英語教師でありながら、自身がアイヌ文化を十分に認識してこなかったことへの気づきが現れている。つまりここでは、「知っていたはずなのに、自分の中で見えなくなっていた」という自己認識の揺らぎが生じていた。A氏は、英語以外の世界の言語についても、世の中には多様な言語が存在するのだということを生徒が知っていくことの必要性についても、あらためて言及し始めた。この経験は、英語を中心として捉えていた自身の言語観を相対化する契機にもなっていたと考えられる。

また、文化継承者による講話について、A氏は、「北海道だけでなく、他の地域の人にもアイヌ文化やアイヌ語があることを伝えなければ、という気持ちで来てくださったんだと思う」と語っていた。ここでA氏は、講演内容を知識として理解しただけではなく、継承者が文化を伝えようとする切実さや使命感を受け取っていたと考えられる。さらにA氏は、生徒たちも強い関心を持って話を聞いていたことに触れ、「お互いにとってすごくいい機会だった」と振り返っていた。ここでは、教師は単に文化を「教える」立場としてではなく、他者の歴史や文化をどのように扱うのかを問い返される側にもなっていた。継承者の語りに触れる中で、A氏自身もまた、その語りを受け取る当事者として学びの場に巻き込まれていたと考えられる。

さらにA氏は、「自分も生徒たちと知識はほとんど変わらなかった」と語りながら、「一緒に学ぶ中で、生徒たちがどのように興味を持っていくのかが分かった」と述べていた。この語りからは、教師が知識を伝達する立場としてではなく、生徒とともに学びに参与する存在として自己を捉え直していることがうかがえる。また、「英語だけではなく、他にもいろいろな言語がある」と語る場面も見られ、英語中心的な言語観が相対化され、より多言語的な方向へと開かれていく様子もうかがえた。

これらの語りから、A氏は、継承者の語り、博物館での学び、生徒との対話といった経験を通して、自身の前提や教師としての立場を少しずつ問い直していったことがうかがえた。そこでは、他者の歴史や文化をどのように受け止め、扱うのかという感覚が立ち上がるとともに、英語を中心としていた視野も、より多言語的な方向へと開かれていった。また、教師自身も「教える側」から「ともに学ぶ側」へと位置づけを変化させていく様子が見られた。

これらの分析を通して重要な点は、こうした変化が、教師個人の内面的省察として単独で生じていたわけではないという点である。A氏の語りでは、継承者による講話、生徒との対話、博物館での経験、同僚との協働といった複数の経験が重なり合う中で、自身の前提や立場が少しずつ揺さぶられていた。つまり、教師の変容は、個人内で完結する認識変化としてではなく、他者との関係性の中で媒介されながら生起していたのである。

特にA氏は、「教える側」としてアイヌ文化を扱っていたのではなく、継承者の語りや生徒の反応に触れる中で、自らもまた学びの場へ巻き込まれていく経験をしていた。この過程を通して、英語中心的な言語観、多文化理解の捉え方、そして教師としての自己の位置づけ（positioning）そのものが、相互に関連しながら再編されていたと考えられる。

5. 考察

本研究で注目されるのは、A氏の変容が、新たな知識の獲得というよりも、自身が前提としていた多文化理解や教師としての立場そのものを問い直す過程として現れていた点である。特に、「知っていたはずなのに見えなくなっていた」という語りには、学校教育の中で一度は接触していたアイヌ文化が、自身の実践や認識の中では周縁化されていたことへの気づきが含まれていた。ここでは、単なる knowledge gap ではなく、「何が見えるもの

として位置づけられてきたのか」という教師自身の前提が問い返されていたと考えられる。

また、継承者の語りに触れる中で、A氏は単に文化的知識を理解するのではなく、他者の歴史や文化をどのように受け止めるのかを問い返される側にもなっていた。こうした経験は、教師に生じた倫理的揺さぶり (ethical disturbance) として捉えることができる。さらにA氏は、生徒と一緒に学ぶ経験を通して、教師としての自己の位置づけを変化させていた。ここでは、教師は知識を伝達する存在としてではなく、他者との関係性の中でともに学ぶ存在として自己を捉え直していた。この過程は、教師が自らの前提を問い直し、他者の歴史や文化へと開かれていく倫理的開き (ethical opening) のプロセスとして理解できる。教師の語りを通して、教師自身の positioning や ethicality がどのように再構成されていくのかを捉えることは、ナラティブ研究においても重要な課題となっている (Barkhuizen, 2016)。

もっとも、こうした変化は、教師が明確な答えや安定した立場へ到達したことを意味するわけではない。むしろA氏の語りには、「自分はどのような立場から語るのか」を問い続ける戸惑いや不安定さも残されており、その揺らぎ自体が、他者の歴史や文化に向き合う過程の一部となっていたと考えられる。

また、本研究で重要なのは、こうした変化が教師個人の内的省察のみから生じたのではないという点である。継承者の語り、博物館での学び、生徒との対話、連続的授業設計といった経験が重なり合う中で、教師の変容は生起していた。Johnson and Golombek (2016) の議論を踏まえると、これらの経験の場は、教師の学びを媒介する媒介的空間 (mediational space) として機能していたと考えられる。

本研究では、アイヌ文化教育という mediational space の中で、教師の前提が揺さぶられながら、他者との関係性の中で positioning を再編していく過程が示唆された。とりわけ、教師の学びを知識や技能の獲得としてではなく、他者との関係性の中で自己の前提や positioning を問い直していく過程として捉える必要性を示している。一方で、本稿は一事例に基づくナラティブ分析であり、教師の変容過程もなお継続的・流動的なものである。今後は、異なる教育実践や教師経験との比較を通して、こうした relational な学びや倫理的揺さぶりのあり方をさらに検討していく必要がある。

6. 結論

本研究では、アイヌ文化教育を経験した若手英語教師の語りを分析し、教師が自身の前提や立場を問い直していく過程を検討した。その結果、教師は、継承者の語り、博物館での学び、生徒との対話といった mediational space の中で、自らの前提を揺さぶられながら、教師としての自己の positioning を変化させていく様子が見られた。特に、アイヌ文化教育は、単なる文化理解の機会としてではなく、教師自身が他者の歴史や文化をどのように受け止めるのかを問い返される経験として機能していた。また、その過程を通して、教師の視野はより多言語的・関係的な方向へと開かれていた。これらの考察を踏まえて、本研究は、他者の歴史や文化に向き合う教育経験が、教師自身の前提や positioning を問い直す契機となりうることを示唆している。

7. 謝辞

本研究に際して、ご協力くださったA氏に心より御礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費 24K04066の助成を受けたものです。ここに感謝申し上げます。

参考文献

- Barkhuizen, G. (2016). Narrative approaches to exploring language, identity and power in language teacher education. In G. Barkhuizen (Ed.), *Reflections on language teacher identity research* (pp. 25–42). Routledge.
- Dovchin, S. (2020). Introduction to special issue: Linguistic racism. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1080/13670050.2020.1778630>
- Johnson, K. E. (2009). *Second language teacher education: A sociocultural perspective*. Routledge.
- Johnson, K. E., & Golombek, P. R. (2016). *Mindful L2 teacher education: A sociocultural perspective on cultivating teachers' professional development*. Routledge.
- Norton, B. (2013). *Identity and language learning: Extending the conversation* (2nd ed.). Multilingual Matters.
- Pennycook, A. (2010). *Language as a local practice*. Routledge.